

学 位 論 文 題 名

郭店楚簡『五行』研究

学位論文内容の要旨

本論文は、一九九三年に湖北省荊門市沙陽区の郭店一号墓から出土した郭店楚簡『五行』（以下、郭店『五行』）を研究対象とし、その思想的特徴と、文献としての構造的特徴を明らかにするものである。

序論「『五行』研究史とその問題点」では、郭店『五行』に関する先行研究を整理し、本論文において取り組む課題を述べる。そこでは、郭店『五行』の出土を『五行』研究上の一つの転換点と見なし、先ず郭店『五行』出土以前、馬王堆漢墓帛書五行篇（以下、馬王堆『五行』）出土当時における研究状況を概観する。一、「《経》《説》構造に対する諸研究の見解とその問題点」、第一節「郭店『五行』出土以前—龐樸・池田説と浅野説—」では、郭店『五行』出土以前にあって、とりわけ研究者の注目を集めたのは、馬王堆『五行』の《経》と《説》の成立時期であるとし、諸研究の見解を《経》《説》同時成立説と《経》《説》異時成立説とに大別する。そして、第二節「郭店『五行』出土以降—池田説と龐樸・浅野説—」では、郭店『五行』出土以前においては、《経》《説》同時成立説を採る見解が大多数を占めていたのが、郭店『五行』が《経》のみの出土で《説》を伴わないかたちで出土して以降は、一転して《経》《説》異時成立説を採る見解が多数を占めることになった経緯を概観する。

そして、二、「問題提起」では、もし仮に『五行』という文献が郭店『五行』のように本来は《経》のみから成り立つ文献であると主張するとしても、総じてこれまでの諸研究には、郭店『五行』から馬王堆『五行』に至って新たに《説》が加わる原因をその思想的要請という観点において説明しようとする視点が欠けており、もし、《経》のみの郭店『五行』と、《説》を伴う馬王堆『五行』との間に、思想的な相違があるとするならば、①その相違をもたらす内在的乃至は外在的な思想的要請こそが、馬王堆『五行』において新たに《説》が付される根本的な原因と見なされるべきこと、②そもそも一体、《説》が加わった馬王堆『五行』と、《説》の無い郭店『五行』とでは、具体的にどういった思想的な違いがあるのかが先ず具体的に把握されなければならないこと、③この点を明らかにするためには、先ず、郭店『五行』は、馬王堆『五行』とは別の文献であることを再度確認し、その独立性を認めた上で、改めて郭店『五行』独自の思想が把握される必要があることを指摘する。更に、こうした問題意識の下で、郭店『五行』の独自の思想を明らかにしようとする研究は未だ皆無であり、したがって、現在のところ、馬王堆『五行』と郭店『五行』との比較研究以前に、郭店『五行』の思想でさえも、それが具体的に把握されたとは言い難い状況にある、と指摘する。

そして、以上のような問題意識に基づき、郭店『五行』を一つの独立した文献と見なし

その思想を読み解くにあたり、本論文では、郭店『五行』の形態的な特徴の一つでもある、竹簡に付された四角形の符号に着目することを提案する。この符号を手がかりとすることで、郭店『五行』の文章の成り立ちを明らかにし、そうした郭店『五行』の文献としての構造的特徴にも着目しながら、郭店『五行』の思想を解説することを提起する。

本論に入り、竹簡に付された墨節符号に従えば、郭店『五行』は計三つの段に分かれることを指摘し、第一章「郭店楚簡『五行』第一段目の思想と構造」では、第一章から第七章途中までを第一段目として区切り、その間における各章節同士の構造的なつながりを確認しつつ、そこで主張される思想を読み解く。とりわけ、これまで様々な解釈されてきた「形於内」という言葉の読解を契機とし、第一段目には専心形内論とでも呼ぶべき思想が見いだされることを指摘する。第一段目には、章節同士の構造的なつながりのみならず、思想の一貫性が見いだされることを指摘する。

第二章「郭店楚簡『五行』第二段目の論述形式と符号」では、墨釘符号に着目し、とりわけ第十八章と第二十章との間に、章節同士の強固なつながりがあることを指摘する。思想的特徴としては、「見てこれを知るは、智なり。聞きてこれを知るは、聖なり」（郭店『五行』第十四章）とあるような聖智論を見いだすことができる、とする。一方で、第一段目でしきりに言及された「形はる」という言葉は、もはや一言も言及されることがないことから、第一段目と第二段目との間には、墨節符号に対応してそれぞれ独自の思想的主題が存することを指摘する。

第三章「郭店楚簡『五行』第三段目の思想と構造」では、第三段目においては、第一、第二段目と異なり、同じ概念を共有する章節がほとんど無く、一貫した思想的主題を把握することも困難で、構造的にも思想的にもまとまりに欠けることを指摘する。

補論「『孟子』万章下篇「金声而玉振之」考—馬王堆漢墓帛書『五行』を手がかりに一」では、『孟子』に対する朱熹の解釈をそのまま馬王堆『五行』に当てはめる従来の手法を批判し、まずは馬王堆『五行』の独自性を認めた上で、改めて馬王堆『五行』の「金声而玉振之」の意味を探るべきことを主張した。更には、馬王堆『五行』における「金声而玉振之」の句に対する考察を基に、今度は『孟子』における「金声而玉振之」の句に対しても、朱熹の解釈に批判を加えつつ、新たな解釈の一案を提示する。

最後に結論において、郭店『五行』については、墨節符号を手がかりとし、思想的主題が顕著な第一段目と第二段目に注目するならば、第一段目の専心形内論と第二段目の聖智論との二つの思想を関連づけ、それを一つに纏め上げていることこそが、郭店『五行』の最も顕著な思想的特徴のようにさえ思えること、したがって、この二つの思想が具体的にいかなる関係にあるのかを明らかにすることが改めて課題となることを指摘する。一方、郭店『五行』第三段目は、第一段目、第二段目に比べると、思想的主題を見いだすことが容易でなく、章節同士のまとまりにも欠け、こうした特徴は、今後、郭店『五行』の編纂過程を考える上でも、一つの判断材料を提供する、と今後の展望を述べる。

また、郭店『五行』にせよ、馬王堆『五行』にせよ、その読解に際しては、それぞれの文献の独自性が確保されず、他文献に対する解釈がそのまま無批判に適用されるという方法論上の問題を指摘することができること、郭店『五行』のような出土資料の新発見により、思想史の再構築ということが叫ばれ、個々の文献に対する思想的な読解と、それによって確認された各文献の思想を「史」的に並べる思想史研究や、或いは、学派分けといった博物誌的研究には関心が集まる一方、各文献の読解に対する抜本的な方法論的批判にま

でその議論が及ぶことは、これまでのところほとんど皆無であることを指摘し、こうした批判が本論文に通底する基本的な問題意識である、と論を結ぶ。

学位論文審査の要旨

主 査 准教授 近 藤 浩 之

副 査 教 授 弼 和 順

副 査 准教授 吉 開 将 人

学 位 論 文 題 名

郭店楚簡『五行』研究

本論文の研究対象は、一九九三年に湖北省荊門市の郭店一号墓から出土した郭店楚墓竹簡『五行』であるが、これとほぼ同じ内容の文献は、すでに一九七三年、湖南省長沙市の馬王堆漢墓三号墓から出土しており、馬王堆漢墓帛書『五行』と呼ばれていた。ほぼ同内容の文献とはいえ、郭店『五行』と馬王堆『五行』との間には、重要な相違点がある。それは、馬王堆『五行』が《経》と《説》との二つの部分から構成されるのに対して、郭店『五行』は《経》に相当する部分しかない。更には、両者に共通する《経》に限った場合でも、章節の順序や構成などに違いが見られる。ところが、従来の研究においては、《経》のみの郭店『五行』を解釈するのに、馬王堆『五行』の章や節の分け方に沿って、馬王堆『五行』の《説》の解説が適用されるという方法が取られていた。本論文では、その両者をまずはっきりと区別して思想的に別の文献として扱い、特に郭店『五行』の構造と思想内容を詳細に分析している。そして、馬王堆『五行』とは違う構造をより明確にするために、郭店『五行』の竹簡に付された墨節符号に着目して、全体を三段に分けて思想内容を考察するという方法を取る。郭店『五行』に多く見える別の符号とほとんど区別されていなかった墨節符号を、区別して分析の手がかりとする方法は、従来の研究にはない画期的な所である。

本論文は、すでに学会誌や紀要で発表された四つの論文を根幹として、前後に新たに書き足した序論と結論を配する形で構成されている。序論では、『五行』研究の現状と課題をわかりやすく説明し、特に《経》と《説》の構造をめぐる諸研究の問題点に着目して、その問題を解決のために、上述のような本論文が取る観点と方法を提起している。

第一章は、「郭店楚簡『五行』の思想と構造—第一段目を中心に—」と題して『中国哲学』第三十五号（二〇〇七年）に発表した論文であり、『中庸』の「誠」の思想にもつながる、内なる思いとは何か、そしてそれが外を動かすのは何故か、という思想的問題の領域における郭店『五行』の位置づけを十分に論証している。

第二章は、「郭店楚簡『五行』の論述形式と符号—第二段落を中心に—」と題して『中国哲学』第三十二号（二〇〇四年）に発表した論文であり、郭店『五行』において墨節符号が他の符号とは異なる重要な意味を持つことを最初に指摘し、それにより郭店『五行』が大きく三つに分けられることを論証したもので、郭店『五行』研究において画期的な意義を持つ。

第三章は、「郭店楚簡『五行』の思想と構造—第三段目を中心に—」と題して『中国哲学』第三十六号（二〇〇八年）に発表した論文であり、章節同士のまとまりに欠ける郭店『五行』の第三段目に対して、基礎的な分析を徹底的に行なっている。

第一章から第三章を通じて、結果的に、郭店『五行』の思想内容や構造を分析し総括しながら、中国古代の思想文献の形成過程をより具体的に考え直すための重要な手がかりが郭店『五行』に存在する、ということを明確にした点を更に高く評価できる。

補論は、『孟子』万章下篇「金声而玉振之」考—馬王堆漢墓帛書『五行』を手がかりに一—と題して『文学研究科研究論集』第六号（二〇〇六年）に発表した論文であり、すでにその解釈が一定に固まっているかのように思われる『孟子』のような伝世文献ですら、馬王堆『五行』のような出土資料の新発見により、その通説に疑義を呈する必要が生じることを、具体的な事例に即して徹底的に分析して、中国古典の解釈の可能性を拡張、その意義を考察した優れた論述である。

従来の研究において、郭店『五行』と馬王堆『五行』はほとんど区別されずに、どちらも同じ『五行』として解釈されるという方法論上の問題が存在していたが、本論文は、墨節符号という動かしがたい物理的な証拠を起点にして、できるかぎり厳密に郭店『五行』独自の思想的 content や特徴を掘り起こし描き出した、という点が最も高く評価される。ただし、郭店『五行』の独自性を強調することにはやるあまり、結論への筋道として論理がやや飛躍したり緻密でなかったりする所がわずかに認められるが、それは本論文全体の価値を損ねるような瑕疵ではない。今後は、関連するその他の思想文献の内容とその思想の形成過程及びその文献の編纂過程について、郭店『五行』の研究で用いた観点と方法を応用して、いかに有効な分析を進めることができるのかを示していく必要があるだろう。本論文が示した観点と方法は、当該研究領域の新たな可能性と方向性を大きく切り開くもので、博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものである。